
キミとのセカイ

雑味珈琲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミとのセカイ

【Nコード】

N0512F

【作者名】

雑味珈琲

【あらすじ】

比較的軽めの小説から分厚い専門書までを愛読するカタブツな彼と、並外れた運動神経を持つが感情を顔にだすのが苦手な彼女。そんな二人の男女の恋愛模様。

プロローグ（前書き）

初の投稿となります
よろしくお願ひします

プロローグ

『・・・私はキミの事が好きだ。キミさえ良ければ私と付き合っ
てほしい』

ふと目が覚めてしまった。

今の時間は朝の6時少し前位。

こんな時間に目が覚めてしまったのも、ついさっきまで見ていた夢のせいだろうか。

いや、夢にしてはかなり現実味があつて何より夢と言つてしまつには多少の違和感がある。

予知夢か？などと少しばかり寝ぼけ気味の頭を覚醒させながら考えてみるが、まさかな。じゃあ予知夢じゃないのなんだ？過去の経験？高校2年生になったばかりの俺には残念ながら、と言つわけでも無いが告白と言つものを受けた事がない。いや小学生の時にはあつたか？だが、所詮小学生の頃の話だ、カウントはされないだろう。そもそも、小学生同士の恋愛は成立するのだろうか？その頃の『好き』という感情はLoveではなくLikeではないか？

そんなことをグルグル考えているうちにいつの間にか時間は過ぎ6時30分を少し過ぎていた。

我が家の朝は早い。と言つわけでもなく、寧ろのんびりと過ごしている。家族は父と母。自分、そして妹の四人だ。今の時間ならば母が妹が朝食を作っている最中だろう。

7時を少し過ぎた頃、着替えや歯磨き、洗顔を終えた俺はリビングへと向かい朝食を摂る。朝食は1日の活力源だ。欠かす事は出来ない。もし食べなかつたら纏まる考えも纏まらないというものだ。

リビングに入ると味噌汁の良い匂いが漂ってくる。早速頂こうと椅子に座るがそこで違和感を感じた。食卓に並んでいるのは白い御飯にワカメの入った味噌汁。それから先日北海道に行ったらしい親戚からの貰い物である鮭の塩焼き。メニューは至って普通だが四大家族の我が家に5人分の朝食が並んでいるのはどういう訳だ？

俺の疑問に気付いたらしい母は可笑しそうに笑う。

「アンタ覚えてないの？まあ無理もないかなあ。アンタ昨日朝食抜いたから全然元気無かったわよ」

そう言われてみれば昨日の記憶が所々曖昧になっている。だが、それとこの5人分の朝食に一体何の関係が？

「まあ後になれば解るわよ」　クツクツと笑いを抑えるように（実際のところ抑えられていない）笑う母を見て息子の俺が困惑しているのに笑うのはどうか、と言ってやりたかったが、リビングの扉が開く音で言うタイミングを逃してしまった。いや、音のせいではない。入ってきた人物に問題があるのだ。もしこれが、父または妹ならば別段問題が有るわけではない。入ってきた人物と言うのは、俺と同じ高校の制服を着て、同じ学年の腕章を付けて、尚且つ、同じクラスの見知った顔をした女子生徒だった。

プロローグ（後書き）

拙作を読んで頂きありがとうございます

一応1週間単位で更新していきたいと思えます

誤字脱字等ありましたらご一報を

小説の評価や感想がありましたら一言でもいいのでよろしくお願ひ
します

セカイの始まり

沈黙。そんな言葉が頭に浮かんだが、今の状況はそういう訳ではない。ならば和気藹々としているのか？と聞かれれば、それもまた違う。

リビングの入り口に立っている彼女は相変わらずのポーカーフェイス（かといって無表情という訳ではない）でその表情からは考えている事が読みきれない。そして、俺の方はと言うと何故彼女がここにいるのか？いつからいるのか？少しばかり顔を赤らめているにも関わらず頑なに俺から視線を外そうとしないのは何故か？可愛いじゃないか。などと俺が感じた疑問から彼女の表情の感想までがもやもやと頭に浮かんでいた。

二人とも無言のまま暫く経つと、リビングの扉がまた開いた。今度は誰だ、と思い彼女から視線外すと、入ってきたのは1つ年下の妹だった。既に学校へ行く準備を済ましているらしく制服姿で背中程ある髪を少し低めで1つに纏めていた。

妹に気付いたららしい彼女は、やっと俺から視線を外しそれを妹に向ける。お互いに、誰？という状態だったが、家族でない彼女が朝から我が家にいるという事の意味が解つたらしく、睨み付ける様にして彼女を見る。少しばかり睨む様な視線を彼女に送った後、今度は俺を睨み、こいつは誰だと言わんばかりの視線を送ってきた。「アンタ達いつまでそうしてるつもり？いい加減御飯冷めるし時間も無くなるよ」

俺達三人は母の言葉でリビングに来た目的を思いだし各々席へと着く。

いたたまきますの言葉の後俺はいつも通り黙々と、彼女も俺と同じ様な感じた。妹も黙々と食べてはいるが視線だけは、俺と彼女を忙しそうに行き来していた。

徐々に覚醒していく頭で昨日の事を思い出してみる。

昨日は楽しみにしていた新しい本を読み耽ってしまい、眠ったのは朝の3時頃だ。そのせいか気付いた頃には8時30分を過ぎていた。学校の授業開始は9時丁度。10分で用意を済ませ、朝から全力疾走で学校へと向かった。

授業開始にはなんとか間に合ったが、全力疾走の疲労感からか授業中の教師の声は右から左へと頭に留まることなく耳から耳へと流れていった。

午前の授業が全て終わりクラスの友人と学食へと向かう。この学校の中で気に入っている場所の1つである学食はメニューが豊富なだけでなく味、質共に良く値段も財布に優しく全て500円以下となっている。

そこに向かう途中、2年Bクラスの図書館委員は直ぐに図書館へ来るように、という放送が流れた。2年Bクラスといえば俺の所属するクラスであり、図書館委員は自分であった。さすがに呼び出しを無視してまで昼食を食べる訳にもいかず、友人達のがんばれよーというなげやりな声援を受け図書館へと向かった。こうして、目が覚めてから一度も食事を行うこともなく午後の授業が始まった。

昼休み後の1つ目の授業が終了し、俺は机に上半身を投げ出していた。

「大丈夫？」

隣から声が掛けられた。

そちらを見ると彼女がいつもとあまり変わらないポーカーフェイスだったか少しだけ眉が下がり心配そうな表情をしていた。

彼女とは1年の頃からの付き合いで、他の同じクラスの連中よりかは多少付き合いが長い。

最初に話したのが入学式の日でたまたま席が隣同士という些細な事だった。

もっても、話したと言っても一言一言で会話はあまり続かなかったが、それは俺に対してだけでなく全員にだったらしく長い会話をしている所を見たことが無かった。気付けば彼女を目で追っている自

分に苦笑いしつつも微妙な表情の変化を感じとれるようになっていた。それが1年生の終わり頃。思えばその頃から彼女の事が好きだったのかもしれない。

・・・話が逸れた。心配そうな表情をしている彼女に朝から何も食べていないという事を伝えると、トテトテという擬音が聞こえてきそうな足取りで2つ隣の自分の席へ戻っていった。見捨てられたかなと考えていると目の前に1つだけ残された5つ入りの薄皮クリームパンを差し出された。

「食べる？」

どうも食べきれず残したらしい手のひらサイズのクリームパンをありがと一言伝えてから貰い、二口程でそれを飲み込んだ。

パンを食べている間、じーと俺の方に視線を向ける彼女に、どうかした？と聞くと、何でないと答え自分の席に戻っていった。

その後の授業中、急激な眠気に襲われた俺は、対抗の意思を見せるも虚しく呆気なく撃沈してしまった。

それ以降の記憶が曖昧になっており、鮮明に思い出すことができない。そう頭の中で考えながら朝食を食べ終わり食後の緑茶を啜っていた。

「聞いているのか？」

少しばかり低く太い声。この様な声の持ち主は1人しかいない。我が家の大黒柱である父だ。質問に答えるためにも頭を思考の海から引き上げる。

「このお嬢さんはどこのお嬢さんなんだ？」

「決まってるじゃないですか。これですよこれ」

父の分の朝食をお盆に載せ歩く母は右手の小指一本だけを上げる。それを見た父は俺と彼女を交互に見るといきなりニヤニヤしながら中々やるじゃないかと呟いた。こう言うのも何だが正直気持ち悪い。「まあそれは良いとして、何で一緒に朝食を？」

それは確かに気になる。と言うかいつから、何で家にいるのかという疑問が未だに解決していない。それより俺に聞かれても困る。俺

だって知らないんだから。

「それは、私が説明します」困惑していた俺を見かねたのか、俺の顔を見ながら控えめに声を上げた。

「実は昨日の放課後に彼に残ってもらって告白したんです。」

そう言った瞬間父母が揃ってニヤニヤし始め、隣の妹が信じられないというような表情をしていた。言った本人は本人でかなり顔が赤くなっている。俺はと言うとやっぱりと言うか頭に血が上っていくのを感じていた。

それでそれで、と相変わらず恋愛話しが好きな母が続きを急かす。

「私はキミのことが好きだ。キミさえ良ければ付き合っただけいいと言ったら、彼は、良いよ、俺もキミのことが好きだから、と」夢で聞いた言葉が彼女の口から出た瞬間全部思い出した。

・・・ちよつと待て。確かに説明してほしかった。お陰で全部思い出した。そこまではいい。まったく問題無い。だが彼女は俺1人に説明しているわけではない。俺を含めた家族全員にだ。全員がしっかりと聞いているなかで自分の告白の内容とその答えを言うのはどういうことなんだ。

父母は更にニヤニヤを深め妹は顔を赤らめながらも愕然とした複雑な表情をしていた。赤らめるのは解るが何故愕然としているんだ？その事に気付いたらしい彼女は無表情のまま顔だけでなく耳まで赤くするという妹に負けず劣らず複雑な表情をしていた。

暫く拷問に近い恥ずかしい状態で食後のんびり過ごす事が出来なかった俺は、その場から逃げる為に学校へと向かう用意をしていた。時間は8時20分過ぎ。ゆっくり歩いて丁度いいくらいの時間だ。

そう言えば彼女は何で家にいたんだ？これだけはいくら考えても解らなかった。昨日はあの後途中まで一緒に帰り後はそれぞれの家に帰ったはずだ。その事を彼女に聞いてみると。

「一緒に学校行くこうと思って来たけど、楽しみにし過ぎて早くに来

てしまった
「た」

セカイの始まり（後書き）

プロローグ入れて第二話となります

改行が下手なせいか読みにくくなってしまったかもしれません。勉強します。

評価や感想ありましたら一言でもいいのでよろしく願います

これから

彼女と付き合いだしてから一週間。俺と彼女は始めこそぎこない感じが端から見ても分かるくらい（初々しいともいうのか？）出ていたわけだが、今となってはそれも無くなった。完全に言うわけでもないが、日常生活送る上では何の問題も無かった。あるとすれば、同級生の好奇心な視線くらいだろうか。

偶々ならばともかく、一週間も一緒に教室に入るとその手の話題に敏感な女子生徒達は彼女に多くの質問を浴びせ、興味津々とも言わんばかりに彼女に詰め寄った。

彼女は彼女でそのような事態に困惑し、俺に助けを求めようとしたらしいが女子生徒という壁によって見る事が出来なかったそう。

男連中もやはり興味があるらしく、周囲の席に座っている何人かが話を聞こうと身をのりだしてきた。

その中には小学校時代からの友人であり親友と言っても差し支えない者もいた。

彼は興味と言うよりも意外というような視線を向けてきた。

因みに彼は妹に好意を持っているらしい。

らしいと言うのは本人から聞いた訳でなく、家に来る時毎度のように聞くのだ、妹は居ないのか？と。その様なことを聞かれると、彼が妹に対して好意を持っているか、嫌っているかのどちらしか無い。もつともそのどちらかだけと断言出来るものではないが、彼は極端な人間なのだ。彼が妹を嫌っている理由も特に見当たらないので、恐らく妹の事が好きなのだろうと勝手に思っている。

話が逸れた。

その意外という視線の意味ばかりは本人に聞いてみなければ分からないが、恐らく俺が何故彼女と付き合い出したのか？ではなく、何故彼女が俺を選んだのか？というものだろう。その疑問に答えてや

りたいのは山々だが、生憎その答えを俺は持ち合わせていない。と言うか、俺自身が彼女に聞いてみたいものだ。

幾つかの質問に答えてやると満足したようで各自談笑したり授業の準備をしたりと好きなように動いていた。俺もそろそろ授業の準備をしなければ。

俺と彼女だけでなく、ここ周辺に住む多くの人達が通うこの高校。公立ではあるが学校行事が中々に多い。5月の球技大会を始めに、6月の陸上競技会、9月の体育祭、10月の文化祭等々メジャーなものから、クラス対抗皆勤賞を狙え、というほぼ永続的な無遅刻無欠席を争うというマイナーなものまである。因みに俺が彼女に告白された日、朝食を抜いてまで急いで学校に向かったのは、この行事の所為でもある。

今は5月。もうすぐ球技大会が始まるのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0512f/>

キミとのセカイ

2010年10月21日22時17分発行